

第3回日韓土砂災害防止技術会議の参加報告

蒲 正之*

はじめに

平成16年10月28日、大韓民国（以下、韓国と略）の大田市内において「第3回日韓土砂災害防止技術会議」が開催された。

この日韓土砂災害防止技術会議は、平成14年3月に第1回会議が韓国において開催され、第2回が平成15年、日本の大阪市内で開催されている。日韓、両国の土砂災害防止のための技術と施策の向上を目指して両国の制度、研究、技術、施策等に関する情報や意見の交換を目的に開催されているものである。

筆者は日本側の出席者の一員としてこの会議に参加する機会を得たので、個人的な印象を含め、概要を報告する。

1 第3回日韓土砂災害防止技術会議

会議は秋色が深まりつつある10月28日、韓国大田市内の山林庁15階の会議室で開催された。会議参加者は以下のとおり、日本側からは坂口哲夫国土交通省保全課長他7名、韓国側からは金賢秀山林庁治山課長他8名が出席した。



韓国山林庁次長への表敬訪問

* (財)砂防・地すべり技術センター企画部長

① 日本側

坂口哲夫 国土交通省砂防部保全課長
 渡邊 茂 国土交通省砂防部砂防計画課課長補佐
 笹原克夫 (独)土木研究所土砂管理研究グループ
 首席研究員
 岡本正男 (社)全国治水砂防協会理事
 友松靖夫 (財)砂防・地すべり技術センター
 理事長
 蒲 正之 (財)砂防・地すべり技術センター
 企画部長
 池田暁彦 (財)砂防・地すべり技術センター
 砂防部課長代理
 阿部柁輝 (NPO)砂防広報センター
 企画調整部主任

② 韓国側

金 賢秀 山林庁治山課長
 鄭 珉鎬 山林庁治山課山林土木係長
 金 鍾淵 山林庁治山課砂防擔當
 崔 正仁 山林庁治山課災害対策係長
 李 天龍 山林科学院林地保全課長
 金 在憲 山林科学院林地保全課研究官
 尹 豪重 山林科学院林地保全課研究士
 李 昶雨 山林科学院林地保全課
 麻 鎬燮 慶尚大学校農業生命科学大学
 山林科学部教授

【10月27日(水)】

日韓土砂災害防止技術会議に参加する日本側のメンバー8名が秋晴れの羽田空港に集まったのは10月27日の朝であった。わずか2時間余りのフライトの後、ソウル郊外の金浦空港に着き、韓国山林科学院の方々の出迎えをいただいた。この日、マイクロバスで高速道を3時間余り移動し、忠清南道山林環境研究所の施設を見学した後、韓国山林庁のある大田市内のホテルにたどり着いたのは21時30分を少し回っていた。

長時間の移動とはいえ、ほとんどが高速道路から眺めただけだったこともあり、日本とあまり変わりのない風景に映った。しかし、都市周辺には規模の大きな高層住宅団地が立地し、その代わり周辺部には広がりのある住宅街といったものが見られない。韓国の地を初めて踏んだこともあり、妙に印象的だった。山林環境研究所の所長さんの張り切った迫力たっぷりの説明も心に残る。

【10月28日(木)】

この日は10時から大田市内にある山林庁15階の会議室で会議が開催される。会議に先立ち、山林庁次長を表敬訪問した。次長から技術交流や人的交流の期待とともに土砂災害防止技術会議の発展を願うことが表明された。

会議は韓国山林庁金賢秀治山課長と国土交通省砂防部保全課長からの挨拶に始まり、日韓両国からの発表及び質疑応答という形で昼食を挟んで進められた。発表は以下のとおりである。

1) 山林流域管理事業と今後の展望

崔 正仁

2) 日本における最近の土砂災害特性

坂口哲夫

3) 日本における土石流研究の現状

笹原克夫

4) GISを用いた砂防構造物適地選定システム開発

尹 豪重

5) 土石流に対する構造物対策の計画と事例

池田暁彦

6) 警戒避難に関する施策

渡邊 茂

7) 金海市内三農工団地災害原因及び対策

朴 在鉉 (晋州産業大学校教授)

B) The Restraint on Slope Failure by Hillside Vegetation during a Heavy Rainfall

小山内信智 (国土技術政策総合研究所
危機管理技術研究センター砂防研究室長)
(資料配付のみ)

各発表内容についてはすでに『砂防と治水』に詳しいのでここでは割愛する。発表と質疑が終了した後には総合討論が行われた。

韓国では最近、災害が大型化・頻発化しており、さらに人工的な土地利用によって災害危険度が增大している。一方、個別の対策や偏った展開によって実効性は低下してきており、今後は山林流域管理事業を重点的に進め、森林育成による災害の防止、GISを用いた施設適地の選定システムで広域的な観点からの効率的な施設整備を行うとの説明がなされている。

日本側からは砂防協会の岡本理事が国際砂防協会発足の説明を行い、趣旨に賛同される向きにはぜひ参加して欲しい旨の要請があった。

こうした議論を経た上で、今後も日本の国土交通省砂防部と韓国山林庁間で交流を行うため日韓土砂災害防止技術会議を開催することを確認して議事録をまとめて終了した。

すでにほの暗くなった会議終了後、山林庁を出発し、今夜の宿泊地大邱市内へと高速道路を移動する。薄暮の中、高速道路を走行するが、沿道に教会とおぼしき建物がずいぶんと目立つことに気づいた。イルミネーションで飾った尖塔がやけに目立つ。1時間30分余りで高速をおりた。料金は日本円にして660円、安い！



会議風景



両国の代表

2 現地視察

【10月29日（金）】

この日、慶尚北道の亀尾市山沙汰復旧事業区：呉太洞及び金泉市山沙汰復旧事業区：農所面鳳谷里の現地視察をした。

呉太洞は、2003年、台風で山腹が崩壊し、約10,000m³の土砂が野溪の出口に位置するため池に流れ込んだもので、日本でもよく見られる災害形態である。谷止工を配置した山腹工が施工されていた。丁寧な施工がされている。高速道路からよく見える位置にあり、景観を配慮したものようである。現場では、工法や日韓の比較など活発な議論が交わされた。

一方、鳳谷里は、やはり2003年の台風で土砂流出のあった溪流で小規模な砂防堰堤と護岸を組み合わせた工法が取られていた。韓国においても自然環境保全の要望が大きくなっており、このため、転石を利用した石積堰堤や石積みの護岸工が施工されてい



鳳谷里の現場



金海市内三農工団地

る。環境保全要望に関する一つの回答事例として現場では考えているようである。ここでも環境対策や流出土砂を運んだ下流貯水池堤の安全性等の意見交換が活発に行われた。

【10月30日（土）】

最終日であるこの日は、朝から2002年8月に発生した大規模な山腹崩壊の現場に向かった。対策は視察をした時点ではほぼ85%の進捗である。工事は排土やアンカー工事、緑化工等を組み合わせたもので、概ねわが国における対策工事と同様である。

大規模な災害現場だけに様々な質問が飛び、1時間近くの見学になったが、この現場の視察をもって第3回の日韓土砂災害防止技術会議の全日程を終了した。

おわりに

3回目となる今回の日韓土砂災害防止技術会議では、情報交換も活発になり、双方の防災対策事情に対する認識も深まっていることが実感された。お互いに顔見知りのメンバーも多く、だんだんと交流会議が育っていることを実感する会議であった。4回目は2005年、日本で開催される予定になっている。

この会議では韓国の方々から手厚い歓迎をいただいた。会議、移動、現場視察とお世話をいただき、快適に日程をこなすことができた。ここに記してお礼を申し上げるとともに、今後さらなる交流が深まることを祈りつつ会議の参加報告とする。



会議参加者の皆さん